
クレセント・ハート 三日月のクレハ

エメレンタールローヒ・スネオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレセント・ハート 三日月のクレハ

【Nコード】

N7526Y

【作者名】

エメレンタルローヒ・スネオ

【あらすじ】

繋がりを断たれた世界、そして新たに放り込まれる世界。その代償として何かを奪われてしまった。それが何かは分からない、だから何か。

胸に渦巻いている空虚さに首を傾げながらも、似て非なる世界決定的に何かが違う世界で生きていく。

誰かの手の平に踊らされながらも

p r 世界

最初はどうでもいいと思っていた。

何もかもが退屈だった。

その行為も特に意味はなく、単なる退屈しのぎに何とはなしに行ったというだけ。

単なる偶然、それを運命だと呼称すれば聞こえは良いかもしれないけれど……そんな表現をするのは何かが違うような感じがして……それはやっぱり偶然と表現するのが正しいと感じるものだった。

その偶然が自分の中にある全てを変えてくれた気がした。

『どうでもいい』が『特別』になっていき、『退屈』が『楽しい』へと変わってゆく。

その時間は、その一瞬だけは一緒に輝いているような……そんな気がして、一緒に居る時間がかけがえのない大切なもののように思えた。

だから、そのこの世界に自分という存在を繋げたいと、そう思った。

p r 世界（後書き）

場面ごとで区切って投稿しようと思っています。

それ故に短くなったり長くなったり、安定しない文量になってしまっ
まうそうです（汗

とりあえず、ここから一気に2話を連投しようと思っています。
拙文ですが読んでくれたら幸いです。

1 旗折師（前書き）

今回から本文が開始、という感じです。
少し長めですが、読んで頂けたら幸いです。
それではどうぞ。

1 旗折師

夕暮れの屋上。

日没寸前の太陽が辺りを赤く照らし、全てを朱色に染め上げていた。

屋上には誰も居ない、グラウンドの方から部活動に勤しむ声が淡々と聴こえてくるだけ。

（……この状況は、一体何なんだろう？）

そう思い、呆然とこの空間に1人だけ佇んでいる学生服を着た少年 篠崎ツバキは溜息を吐いた。

『話があるから屋上で待つてて』

と帰るために支度をしている時に幼馴染から言われたので待つているのだが、その呼びだした張本人が一向に現れない。

もう既に待ち始めてから1時間以上が経とうとしていた。

何の用があつて呼びだしたのか、そして呼びだしたくせに今どこで何をやっているのかは不明。

とはいえ長時間たった1人だけで待たされて『いい加減、もう帰ってもいいんじゃないだろうか？』という思いが頭の中を巡り始めているというのが正直なところであつた。

「……どうした、もんかなあ」

ハア、と溜息混じりに独り呟く。

流石にもう家へと帰りたいとそんな思いが頭を巡る、けれども呼ばれたのに勝手に帰るというのもそれはそれで何だかいけないようなことの気がして行動を起こすのは躊躇われた。

（……それに、このまま帰ったら……あいつ、怒りそうだしなあ）

呆然とフェンスに寄りかかりながら、今見上げている真っ赤な空の色と同じくらいに顔を真っ赤に染め上げて怒りを露わにする姿を想像する。

『あんた馬鹿じゃないの！あたし、待つて待つて言っただじゃない！？何で待つてくれなかったの！？』

とそんな風に怒鳴り散らしてくる姿を想像する。

(……何て理不尽なんだ)

自分で想像しておいてツバキは頭を抱えた。

想像をした言葉の内容は『理不尽』としか表現できないものであった、だが本当にそんな言葉を言うてくるのが困ったところであった。

それは幾度となく繰り返されたこと。

何故かは知らないが友人と折り合いが悪いことが奇跡的なまでに多く、毎日のように買い物へと付き合わされたり、遊びへと『仕方なく』誘われることが多々ある。

そして、家が隣同士だというのに何故か遠い場所で待ち合わせをする時はほぼ遅れてやってくるのがいつものパターンだった。ちなみに『ほぼ』という部分がまた困ったところで、遅れてくるからとたかをくくって自分も遅れていくと予定通りの時間に居る何ていうこともあったりする。

最初、いつまで経っても来なかったので

『まあ、そういうこともあるか』

と自己完結をして帰宅したら烈火のごとく怒られた。理不尽な理由で怒られた。

それ故に以降はどんなに帰りたくても帰らないようにしているわけなのだが、それでもそんなことは関係なくほぼ遅刻をしてくる。

加えて、そのことを指摘すると

『な、何言ってるの？……えっと、その、待つのも男の甲斐性ってやつよ。甲斐性なし』

と、頬を今見ている空のように赤く染めながら目を逸らすのである。

どちらに転んでも理不尽なことには変わりなかった。

「……はあ」

全くと言っていいほどに溜息しか出てこない。

(……どうしたら、いいんだろう?)

そうは思うが、どうしようもないと思う自分が心の中に居るのも確かだった。

「……うーん、でも、そうだなあ」

空を見上げながらポツリと呟く。

このまま帰ったら理不尽な理由で怒られるのは分かり切ったことであつた。

きつと想像したように今見ている真っ赤な空のような顔で怒鳴り散らしてくるのであろう。

「ハハッ、まったく」

本当に溜息しか出てこない、とそう思ってツバキは苦笑をしながら肩を竦めた。

(……まったく、本当に)

本当に理不尽だ、とそう思う。

思えば昔から理不尽だったとそんなことを思い出す、本当にいつもいつも理不尽で理解不能なこと尽くめで驚いてばかりだったと。だけど、そんな理不尽に対して怒りだとか不満だとかいった感情は全く浮かんでこなかった。

「うん、まあそういうこと、なんだろうなあ」

意味もなくウンウンと首肯をする。

きつと慣れたのだろう、とそう思って想いを巡らす。

今現在、呼び出たくせに待ちぼうけをくらわされているという状態を鑑みても『まったく、あいつらしい』という安堵にも似た奇妙な納得感しか浮かんでこなかった。

これを『慣れ』というのだろう、とそんなことを思う。

だから、例えこのまま来なかったとしても

『何か事情があったんだろう、そういうこともある』

と自己完結して、まさか！何かの事件にでも巻き込まれたのでは！？とか冗談交じりに考えて『理不尽』に対して溜息を吐く方が何倍も良いとそんなことを思った。このまま帰って『理不尽』な理由で怒られるより何倍も馬鹿らしくて良いと。

「フツ、ケセラセラ……だったかな？」

「あんた、何ブツブツ独り言を言ってるの？」

鼻で軽く笑ってうる覚えの方言を呟いていると、不意に扉の方から声が掛けられた。

直後、金属質な音と共に扉が閉まる音が屋上に鳴り響く。

1時間以上も遅刻をしてようやく現れたようであった。

彼女はまるで危ないものでも見るかのような眼でこちらを見ています。それは長時間の遅刻をしたとは思えないほどに理不尽で、思わず肩を竦めたくするような、そんなひどい対応だった。

「ハハッ、まあ誰かさんが人呼び出した割には来ないもんだからさ、暇だったんだよ」

苦笑をしながら寄りかかっていたフェンスから身体を離す。

それまで危ないものでも見るかのような呆れた眼でこちらを見ていた彼女が少しうろたえるように身じろぎをした。

「うっ、それはその……えっと、ま、待つのも男の甲斐性ってやつよ！感謝しなさい」

頬を少し赤く染めて彼女は取り繕うように目を横に逸らした、何故かは知らないが誇らしげに胸を張っている。

「……ハハッ」

その台詞も仕草も想像した通りで、何とも理不尽だと感じるようなもので、ツバキはどこか安堵するかのような苦笑を洩らした。

本当に何とも彼女らしいと思えるもので、とてもおかしくなった。彼女は屋上と屋内とを繋ぐ扉の前に立っていて、何故かその手には大きなビニールの買い物袋を抱えている。

どうやら人呼び出しておきながら今まで買い物をしていたようであった。

理不尽だ、とそんな感想しか浮かんでこない。本当に彼女らしい『理不尽』だ、とそんな感想しか浮かんでこない。

（ホント……ヤレヤレって感じたよ）

そう思い、ツバキは目を瞑って安堵するかのように息を吐いた。

「ん？何よ？その顔は？」

「へ？」

不機嫌そうに眉を顰めた彼女に見咎められる。

ツバキは意味が分からないと少しばかり呆然としたが、それを見て彼女は更に眉を顰めた。

「ふんっ！まったく……あんたって、いつもそう。『僕には全部わかってますよ、お嬢様』とでも言いたげな顔をして」

「えっ？いや、そんな顔はしてないと……」

「してた！まったく、しょうがないお嬢様だなあ、とかそんな顔だった！」

即時の糾弾。

反論は許さないとでも言うような断定の口調だった。

(……うゝん、そんなこといわれてもなあ)

気まずさに負けてポリポリと頬を掻く。

曰く

『僕には全部わかってますよ、お嬢様』

という顔をしていたらしいが、

(『僕』とか『お嬢様』とか間違っても頭の中には出てこないんだけどなあ……)

そもそも一人称自体あまり使わないし『お嬢様』なんて間違っても使ったりしない、とツバキはそんなことを思いながら漫然と顔を

赤く染めている彼女を眺めた。

不満げに唇を尖らせ不機嫌さを態度で表わすかのように明後日の方向を向いている。

理不尽 そんな言葉が頭に浮かんでくる、帰っても帰らなくてもどちらにしろ怒られることには変わりないようであった。

今もチラチラと視線だけを向けながら、ブツブツと何かを呟いている。

（ふう、まったく……）

彼女らしいと言えば彼女らしい、そう思ってツバキは当初思っていた通り『理不尽』に対して暖かい溜息を吐いた。

やっぱり『慣れ』というやつなんだろう、とそんなことを思いながら。

「……むっ」

溜息を見て、彼女がまた眉を顰める。

「……何かイラッとする溜息ね……あたしのこと馬鹿にしてる？」

「えっ？ いや、そんなことないって」

「ホント？」

「ホントホント」

彼女の問いに対して即座に頷いて肯定する。彼女は不満げに呻くが一応は納得してくれたようで渋々と引き下がってくれた。

いい加減、話を先に進めたい。

そう思つての行動だった。

チラリと空を見ると、太陽が落ちかかっており夜になりかけていた。

「……あゝ、それでさ。何か用事があるんだよな？呼び出したんだから」

「うつ、え、えつと……あ、当たり前じゃない！その、用件はある……ある。そう、ある！」

何故か少しうろたえながら同じ言葉を何度も言っつて、気恥ずかしそうにそつぽを向く。

その顔は周囲が夜の色に染まり始めているはずなのに、夕陽の色に染まっていた。

「……あの、その……ごめん、ね？待たせちゃった、よね？」

「え？うん、まあ少なく見積もっても1時間以上は」

そつぽを向いたまま視線だけをこちらへと寄こしたまま投げかけられた問いに対して素直に答える。

（……あれ？2時間くらい、だったかな？）
返答をしてから少し考え込む、が今まで時間を確認してなかった
ので正確にどれほどの時間を屋上で過ごしていたかは分からなかった。

2時間と言われれば2時間の気がする、3時間と言われれば3時間
のような気もする。

（まあ、いつか）
とりあえず1時間以上なものには変わりないから嘘ではないだろう、
とツバキは非常にアバウトなことを考えて自己完結した。

「……そつ、か。1時間以上、か」

「うん、まあそうだね」

「あ、はは」

力のない笑い。

その笑いは何か絶望的なものを叩きつけられたかのような、それでいて何か安堵するかのようにも見える不思議な笑みだった。

(……妙だな)

どうにも落ち着かない気分に襲われて所在なさげに頭を掻く。

彼女は傍目から見ても明らかほどに申し訳なさそうな顔をして、上目遣いでこちらを見つめてきた。

「うう、その、ごめんね？ツバキ。……あの、あたしだって、悪いとは思ってるの。いつもいつも遅れちゃって……その、好き好んで遅れているわけじゃないんだけど！……でも、いつも色々と迷っちゃって、今日も迷っちゃって、遅く、なっちゃって……ホントに、本当に、ごめんね」

「……」

ツバキは何も言えなかった。

それはとても弱々しい言葉だった。

『ふざけるな』

なんて言葉は欠片も出てこないけれど、仮にそんなことを言っただけで拒絶してしまったら全てが壊れてしまいそうなほどに弱々しくて……そんな言葉を口にする彼女も、今にも涙が零れ落ちそうなほど濡れた瞳をしていて、自分に許しを請うような怯えた態度をしていて、その姿はとても弱々しいとを感じるものだった。

その姿を、普段は絶対に見ないような彼女のそんな姿を見て

(……雨でも降るんじゃないだろうか？)

ツバキは天気の心配をした。
身体の芯からゾクゾクと震えがあがってくるのを感じる。
彼女は動かない、上目遣いのままこちらを見つめている。おそろく何か言葉が掛けられるのを待っているのだろう。

「……」

「……」

静寂。

ツバキはそのまま空を見上げた。

「……ふむ」

「え？あの、ツバ、キ？」

控えめに声を掛けられるが、取り合わずにそのまま空を見る。
太陽はもう地平線へと隠れる寸前で綺麗な三日月がぼんやりと浮かんでいた、周囲には雲が1つも見当たらず雨が降る気配もなかった。

（……うーん、やけにしおらしいから変な感じがしたんだけどなあ）
降りそつにはないな、とそんなことを思いながらパリパリと所在なく頭を掻く。

いつも強気で『理不尽』なことをしてくる幼馴染の弱気なしおらしい姿、それは初めて見るものでとても不可解なものであった。

いつも見る姿とはまるきり逆のもので、全くと言っていいほどに何も分らない。

だが、不可解で何も分らないことの中から1つだけツバキは理解をした。

（……迷ったから遅れた、か）

呆然と頭の中で彼女が口にした言葉の内容を反芻する。

彼女の謝罪 とても長くてたどたどしい口調で語られたそれは、本当に申し訳ないと思つていと心から思つていと実感出来るものだった。

申し訳ないと思つているがゆえに長くたどたどしいものであったが、頭の中で整理して短く要約をすると

『遅れたのは故意ではない、迷つたから遅れた』

となる。

少なくともツバキはそんな風に要約をした。

(……そうなのか、方向音痴だったのか)

今まで全く知らなかった、と心の中で呟く。

きつと目的地に到達するまで何処とも知れない道を彷徨つていたのだろう、まったく分からない場所に出てしまつて、それでも頑張つて分かる道まで引き返したり地図を確認したりして最後まで諦めることなく頑張つて待ち合わせ場所まで来ていたのだろう。

そんな姿を想像してツバキは涙を流しそうになった。

どんなに頑張つても変えることの出来ないもの、生まれながらにして持つ生来の気質だとか、そういうものがある。

(うん、無理なものは無理、そういうことであるんだよねあ)

きつとそういうことなんだろう、とツバキはそんなことを思った。

「えつと、ツバキ？あの、何で目頭を押さえ……」

「大丈夫」

「え？」

「大丈夫、気にしてないよ。どんなに遅れても、どんなに待つことになつたとしても、絶対に待ち合わせ場所には来てくれた。それだ

けで十分だよ」

「ふえ？……えっと、ホン、ト？」

「うん」

ニツコリと満面の笑顔で、彼女に良く見えるようにと大仰な仕草で首肯をする。

自分は今、人生の中で最も素直な気持ちで最高に優しい笑顔を浮かべている。そんな自覚があった。

「……そっか。フフフっ、そっかそっか」

ウンウンと目を瞑って小刻みに頷く。

その顔はそれまでの弱々しいものから一転して、みるみる明るさを取り戻していった。

小さな笑みを零し、最後に景気づけるように一際大きく頷く。そして

「あははっ、うん！ツバキ、あんたって本当に馬鹿ね！」

本当に、本当に嬉しそうな太陽のような笑顔でそう言った。

「……ハハハ、そうかなあ？」

「うん！馬鹿、ホントにスツゴイ馬鹿！」

「アハハ……」

思わず苦笑を洩らす。

理不尽だ、と頭の中ではそんなことを思っていた。
彼女は本当に嬉しそうな顔で『馬鹿』と連呼する。

少しばかり顔が引きつり溜息を吐きそうになるが、今は慈愛の方が勝っているため顔は最高に優しいと思える笑顔を保っていた。

このタイミングでどうして馬鹿という言葉が出てくるのかは理解出来ない、けれどそんな彼女らしい『理不尽』な姿に少しばかりツバキは安堵した。

今の彼女は何か心の中に抱えていた懸案事項から解き放たれたような、そんなすがすがしい笑顔を浮かべている。

（きつと、自分の弱い部分を見せるのが怖かったんだろうなあ）

自分が方向音痴で目的地に着くまで長時間かかってしまう、という事実を改めて打ち明けるのは怖かったのだろう。

自分から自分の弱い部分をさらけ出すことは簡単に出来ることじゃない、とそう思っただけでツバキは不可解だった彼女の弱々しい姿に納得をした。

きつとこのことを言うために今日は屋上に呼び出したのだろう、とそんなことを思う。

それほどに彼女は晴れやかな笑顔を浮かべていた。

そんな彼女の笑顔を見て、一つ苦笑をするように肩を竦める。

ツバキも彼女がいつも遅刻をしてくる理由がハッキリして、今まで心の中でモヤモヤとしていた部分がスッキリと無くなった。

これからも遅刻をしてきたとしても気長に待つことにしよう、彼女もその方向音痴という点に悩み苦労をしながらも頑張っているはずなのだから。

（うん、細かいことは気にしない）

一つの頷きと共に決心をし、未だに綺麗な笑顔を浮かべている彼女の方に向かって歩き始める。

「それじゃ、そろそろ帰ろうか？」

「フフフっ……って、えっ？何？何か言った？」

「いや、もう暗くなり始めてきたからそろそろ家に帰らないって？」

「えっ？」

言葉を聞いた瞬間に彼女がたじろいだ。

（あれ？用は終わったんじゃないの？）

彼女の様子にツバキは少しばかり首を傾げる。

「……あゝ、と、帰らないの？」

「だ、駄目っ！その、まだこ、こ……うゝ、とにかく駄目っ！まだ、えゝと、そう！用はこれからなの！」

彼女が慌てるように顔を真っ赤に染め上げて否定をする。用件はまだ終わっていないかったようであった。

思わずパリパリと頭を掻く。

月は先ほどよりもハッキリと見えるようになり殆ど夜になりかかっている。正直なところ早く家に帰りたい、というのが本音であった。

頭をパリパリと掻きながら先を促す。

「えゝと、それじゃ、その用事って？」

「うっ……それは、その、えっと」

「……？」

ツバキは彼女の様子を見て、思わず首を傾げた。

顔を真っ赤に染め上げて、何かを躊躇うかのように手をモジモジと動かしている。

（その用事を済ませる為に呼び出したっていうのに何でそこで止まるんだろっ？）

何か言いにくいことなのだろうか？と思考を巡らせながら何かを躊躇っている彼女の姿を眺める。

あるいは今、彼女が告げようとしていることは自分が方向音痴であると告白すること以上に打ち明けにくいことなのだろうか？

彼女の姿を見てツバキはそんなことを思った。

「……ふむ、言いにくいことなら別に無理をして言ってくれなくてもいいよ？」

「え？」

呆然と彼女がこちらへと顔を向ける。

その顔を、赤みが無くなった真っ白な顔を見つめながら続きを口にする。

「何というかさ、そんなに言い淀むってことはさ、出来れば言いたくないことなんだろ？ だったら……」

別に言ってくれなくても構わない、何も言わなかったとしても何も変わらない。細かいことは気にしないからさ。

そう続けようとした瞬間、何か絶望的なものを見たかのような色を無くした表情で彼女が慌てて声を荒げた。

「駄目っ！ それは、駄目！……その、今日は頑張っって言おうって、そう心に決めてきたから」

「えっと、そう、なの？」

「うん……確かに、言いだすのは凄く怖くて、このままでも……まだ、このままでもいいかなって、そうも思う……でも！凄く怖い、けど伝えたくないわけじゃない……変わりたいくないわけじゃないの」

「……あゝ、そう、なんだ」

「……うん」

「……」

コクリと消え入りそうなほど小さな声で返事をする彼女を見ながら、思わず呆然と頭を掻く。

いったん真つ白になった彼女の顔は、言葉を紡いでいくにつれ紅潮していき今ではこれ以上ないと言えるほどに赤く染まっていた。
(……ふむ)

どうしよう、と心の中で少しばかり焦る。

ツバキには良く分からなかった。何が分からないのかというと、そもそも全体的に良く分からなかった。

当たり前だ。これから伝えようとしていること、今はまだ彼女の中にしかない言葉を前提に独白しているのだから、それを知らない自分が分かるはずがないじゃないか。と、そんな風に心の中で言い訳をする。

だから、今の言葉がどういうことなのかは分からない。けれど、今彼女は心の準備が必要なほどに何か大切なことを伝えようとしているということ。

それだけはツバキにも分かった。

「……うん、分かった。いや、何を言おうとしているのかは全然分

「かないんだけど、とりあえず良く分かった」

「え？……えっと、その、どういう、こと？」

控えめに、途切れ途切れに言葉を発しながら彼女が呆然と呟く。

その瞳は何かに怯えるように揺れていた。

その瞳を、その不安げな瞳を見つめながら言葉を続ける。

「大丈夫、何を言おうとしているのかは分からない……分からないけどさ、何を言ったとしても絶対に笑ったりしないし、馬鹿なことを言って茶化したりもしない。しっかりと言葉を受け止めるよ」

だって、その言葉は君にとって大切なことだと思うから。

そう心の中で続きを呟いて、ツバキは静かに頷いた。

「……………その……………ホン、ト？」

「ああ、ホントだよ、本当。ホントに本当」

「……………そう、分かった」

ポツリと、消え入りそうなほど小さな声で呟いて彼女も静かに頷いた。

それはつい先ほど耳にした小さな声よりも更に小さな声で、本当に今まで聞いたことが無いような小さくか細い女の子の声だった。

その言葉と同時に、それまで不安げに揺れていた瞳が安心を取り戻したかのように輝きを取り戻す。

彼女は何かを決心するように一度目を瞑ってから改めてこちらへと瞳を向けた。

「それじゃ、今から、言うから……あたしの気持ちを、ずっとずっと前から伝えたかったことを言うから……最後まで、ちゃんと聞いてて、ね？」

「……」

ウン、と無言で頷きを返す。

元からそのつもりだった。

もはや言葉は要らない、最後まで口を挟まずに彼女の言葉を受け取ろうとそう思う。

彼女は買い物袋を持ったまま胸の前で手を組んで、深く息を吸っては吐いてを繰り返していた。

一時の静寂。

彼女の息づかいだけが聴こえる静かな世界だった。

まるで音だけを切り取ったのではないかと思えるほどに他の音は何も聞こえてこなかった、ただ月の光と落ちる寸前の太陽だけが全てを照らしている。

そして、そんな幻想的とも思える光景の中で彼女は意を決するように目を見開いた。

「……あの、ね。あたし、小さな頃からツバキにずっと伝えたかったことが、あるの」

たどたどしく吹けば消えてしまうような弱々しい声で言葉が紡がれていく。

その言葉は段々と尻すぼみになっていき、それと同時に彼女の顔は段々と赤みを増していった。

身体は強張り、フルフルと小刻みに揺れていく。

「あ、あの、ね。あたし、小さな頃からずっと、ずっと……」

「……」

彼女の身体がガクガクと一瞬前よりも確実に強さを増して大きく揺れる。

硬く閉じられた瞳の端には涙が溜まっていた。

「……っ、ずっ、と、あんたのことが、ツバキの、ことが、す、すき」

「……」

言葉を紡ぐにつれ身体に込められた力がどんどん強くなっていき、ついに瞳の端に溜まっていた涙が頬を伝って零れ落ちた。

それを皮切りにこれ以上は無いというほどに真っ赤な彼女の顔が更に紅潮していく。

そして、

「っ！す、すき焼きみたいに見えてたの！！」

限界を超えた彼女がそう叫んだ。

「……」

これはどう反応すればいいんだろう？とツバキはそう思って呆然とした。

「……えゝ、と」

「っ！な、何！？まさか告白でもすると思った？フンッ！っ、うう、

か、勘違いしないでよねっ！」

プイツと何故か泣きそうな顔で彼女がそっぽを向く。

（いや、そんなことは思ってたけどさ）

と、ツバキはそんな風に思うが口には出さない。言ってもややこしいことになるだけだということがツバキには分かり切っていた。

「……あゝ、その」

「っ！」

言葉に反応してビクツと肩を揺らす。

ツバキは心の中で焦った。

本当に、まったくといっていいほど何を言えばいいのか分からない。

何かを言わなければいけないと、そうは思うのだが言葉が一向に出てこなかった。

すき焼きみたいと言われても、どう返せばいいのか分からない。

そんな風に言い淀んでいると彼女がガサガサと手に持つ買い物袋を漁りながら足早に近づいてきた。

「フンツ！あんた、頭に糖分が足りてないんじゃないの？だから、そんな……そんな恥ずかしい勘違いをしちゃうのよ！」

「いや、そんな勘違いはしてないけどさ」

「黙れっ、口ごたえするなっ！」

「はい……」

勢いに負けて、半ば反射的に返事をしてしまう。

このあたりに『慣れ』というものが表れているような気がしてツバキは少しばかり悲しくなった。

「フンツ！糖分よ、糖分。あんたの頭に糖分が足りてないのが全部悪いのよ！」

「いや、何かもう意味が分からな」

「うるさい！口を挟むなっ！」

「はい……」

再び、反射的に肯定を返す。

そして彼女は慣れきってしまったこちらの反応へは目もくれず、ガサガサと漁っていた買い物袋の中からバナナを取り出した。

「フンツ！それもこれも糖分が足りてないのが悪いのよっ！そう、だから、その、それでも食べて糖分を補給しなさい！」

叫ぶなりグイツとバナナを押しつけられる。

「……」

ツバキは無言でバナナを受け取った。

もはや何かを言う気は欠片も起きなかった。

何とはなしにバナナを一つだけ房からもぎ取る。そうして房に残るバナナは残り7個となる。

とりあえず1本だけで十分だから残りは返したい、とそう思うが彼女はこちらを確認することなく屋内へと繋がる扉へと歩き出し

ていた。

（全部食えと、そう言うんだろうか？）

出来れば勘弁してほしい、とツバキは両の手に持つバナナを眺めて呆然とした。

理不尽だ、とそんな言葉が頭を駆け巡る。

糖分が足りないバナナを押しつけて、1人だけ残して先に帰ろうとする彼女の姿は本当に『理不尽』で。理解不能なこと尽くめで（……ふう、ホント、やれやれって感じだよ）

そう思っテツバキは安堵するかのようニ苦笑を洩らした。

本当に彼女らしいと、そう思う。本当に彼女らしい『理不尽』な姿だと、そう思っテツバキは安堵した。

ギィと金属的な音が鳴り響く。

彼女は既に扉の前に立っテいて、こちらを見つめていた。

「ツバキ！今日のことは、その、何でもないんだからね！もう、全部わかつちゃってるかもしれないけれど、その、本当に何でもないんだからね！」

「あゝ、うん、はいはい」

「フンツ！何よ！その適当な返事は！うう、あんたのことなんか、本当に何とも思っテないんだからね！」

ガタン！と扉が乱暴に叩きつけられる音が鳴り響く。

その音を最後に、捨て台詞のように叫んだ彼女は屋上から姿を消した。

それまでどこか暖かな雰囲気が流れていた空間に閑散とした風が吹き抜け、一拳に空虚な空間へと変わる。

ツバキはそんな独りっきりの空間で一つ息を吐いた。

（勘違いしないでね、と言われてもなあ）

呆然と半ば反射的にバナナを持った手で頭を搔く。

ツバキには言葉の半分以上も理解することが出来なかった。

『勘違いしないでね』

そう彼女は言っていたが一体どこに勘違いをするような要素があったのだろうか？と首を傾げる。

話を聞いていた限りでは何処にも勘違いするような場所などは無かった気がした。

「うん……うん！良く分からないな！」

コクリと勢いよく頷いて、頭の中で解決できない問題に見切りをつける。

少なくとも自分は何一つ勘違いなどしていないのだから何も問題は無いだろう、とそう思っただけでツバキも屋内に繋がっている扉の方へと歩き出した。

彼女が来る前まではしっかりと辺りを照らした太陽は地平線へと沈み、今では月が爛々とした輝きを放って辺りを照らしていた。

今が時間にして何時になるのかは分からない、けれど今日はもう家に帰ろう。

そう思いツバキは扉に手をかけた。

瞬間、その場所で最後に彼女が叫んだ言葉が頭に反響する。

『あんたのことなんか、本当に何とも思っていないからね！』

と彼女はそう言った、それはもう真っ赤な顔で力いっぱい叫んでいた。

「……ふっ」

それを思い出して、思わず軽く笑ってしまう。

（うん、大丈夫。何も、勘違いなんかしてないさ）

心の中で先に屋上を後にした彼女へと話しかけるように呟いて、

扉を開ける。

彼女は本当に自分のことなんか、篠崎ツバキのことなんか何とも思っていないということ。それをツバキはしっかりと知っていた、随分と前に自分の居ない場所で友人と思いき人達に必死な様子で叫んでいたのを聞いていた。

（……でも、だからどうしたって、そんな話だよな）

そう関係ないと、自分のことをどう思っているようにと関係ないと思う。

何故なら彼女がどう思っているように自分は彼女のことを大切だと、そう心の底から思うから。

（そう、自分の心は変わらないから）

フツとどこか自分を馬鹿にするような笑みを浮かべて、ツバキは背後で扉が閉まる金属的な音を耳にした。

1 旗折師（後書き）

デレたあとにツンがくる……ツンデレではなくデレツン、最後に突っぱねられるから救いが無いという……ご愁傷様です、名前も出てないけどこれで出番は殆ど終わりだよ。やったね！
とか思ったりしていました（笑

2 魔女（前書き）

ここから一気に超展開になります。
文章も少なめですが、読んで頂けたら幸いです。
それではどうぞ。

2 魔女

部屋。

どことも知らない小さく奇妙な部屋の中、窓も出入り口も存在しない本当に奇妙な部屋の中。

おおよそ人の生活感とは無縁で、食料も水も存在しない部屋の中で魔女は笑っていた。

「ふ、ふふ、あはははははははっ！ふっ、くくっ、何て馬鹿なのかしら？この子、くくっ、本当に面白いわ」

視線が向けられているのは大きな水晶球、そこに映る篠崎ツバキの姿を見て魔女は本当に愉快そうに笑っていた。

人間では有り得ないと思われる長い瑠璃色の髪を揺らしながら、妖しいと表することが正しいと思えるほどの異常に整った顔を喜色満面に染めて少女のように笑っていた。

「ふふっ、本当にいつも面白いわ。くくっ、あんなに、あそこまであからさまで馬鹿にしたくなるほどなのに欠片も気付かないで全く別のことを考えるなんて、くくっ、本当に可愛い子ね」

クスッ、と上品に笑って水晶球へと映るツバキを愛おしげに眺める。

魔女としてはツバキに想いを寄せる幼馴染という存在は少し気に入らない部分もあるが、それを全く理解していない、片鱗すら掴んでいないツバキの珍妙な応答はそんな気に入らない部分を補って余りあるほどに愉快で心地良い反応であった。

「くくっ、傍から見たら丸分かりなのに、ねえ？ふふっ、救われな

いわねえ、本当に思わず馬鹿にしくなっちゃうくらいに、ね」

実際、心の中では馬鹿にしていたけれど。

と、胸の内で続けて魔女はニヤリと冷たい笑みを浮かべた。

まさか本当に欠片も理解されていないとは、言葉を途中で変更した臆病者も夢にも思っていなかったであろう。

「ふふつ、まあ私にも想像つかなかったけれど、ね。ふふつ、本当に私が想像をつかないことをするのが上手ね、可愛くて愛しいツバキくん」

ニツコリと、ついさつき浮かべた笑顔とは真逆のやわらかな笑みを浮かべて魔女は水晶球に映るツバキを細くしなやかな指で撫でた。彼を眺めているだけで『退屈』が『楽しい』に変わっていく、彼を眺めているだけで幸せが胸を満たしてくれる。

もはや魔女にとってツバキを眺めることだけが生活の全てとなっていた。

本当に、本当にあるとき退屈凌ぎの為だけにたった一人の人間に繋げてみて良かったと思える。

それは単なる偶然、だけでもそれが全ての始まりだった。

「ふふ、大好きよ、ツバキくん」

脳を惚けさせるような甘ったるい声で、水晶球に映るツバキへと話しかける。

無論、返事なんてものはなかった。

それは当然のこと。一方的にこちらが見ているだけで干渉などは出来ない壁を一つ隔てた向こう側、声を届けることなど叶わないのだから。

自分は今、世界の理から外れた時の狭間とでもいうべき場所に独

りでいるのだから。

触れたくても触れられない、声を届けたくとも届けられない。そのことを少しばかりもどかしく感じる。

彼を囲う為の箱庭は、世界はもう出来ている。でも、何も出来ない、このままでは魔女には何も出来なかった。

「ふう、早く死んでくれないかなあ、ツバキくん」

ポツリと呟いて、魔女は愛しいものを見つめる。

水晶球に映る彼の姿は脳天気で何処までも馬鹿みたいで、ちょっとやそつとでは死にそんな気配は全くなかった。

当たり前である、人間が日常生活をただ送るだけで死の危険なんでものは皆無に等しいなどということは魔女も理解している。

でも、死んでくれないと困るというのも事実であった。

とはいえ本当のところでは実際に死んでもらわなければならない、というわけでも無かったりする。

死に直面する、あるいは死に瀕する。その時なら世界との繋がりが揺らぎ、こちらへと引き込むことが可能。

後は箱庭である『世界』へと放り込むだけ。それだけなのだが、そのタイミングは一向に訪れるような気配はなかった。

「ふふっ、まあ構わないけれどね。私はどれだけでも待つもの」

そう、最悪で天寿を全うするまで待つことになったとしても、そのタイミングで引きずりこめば良いだけなのだから。

そして、チヨイチヨイと身体を弄って肉体年齢と場合によっては精神年齢も戻してやるだけである。

それはどこまでも自分本位で自分勝手なエゴイズム。けれども、そんな自分のエゴイズムでツバキを染め上げることも魔女にはひどく甘美なものに思えて少しばかり頬を上気させた。

「ふ、ふふ、ふふふふふふ」

昂揚する心の赴くままに可憐な唇の隙間から笑いを零していく。

「大好きよ、ふふふふ、本当に心の底から大好きよ。愛しい愛しいツバキくん、これから私をもっともっと楽しませてね」

ニツコリと恋焦がれる少女のような満面の笑顔を浮かべて、水晶球に映るツバキの姿に口づけをする。

それからはツルツルとした水晶の感触しか伝わってこないが、今はそれで十分だった。

突発的な要因であるにせよ、天寿を全うするにせよ人間の生はいつか終わりを迎える。

待つ時間はもしかしたら一瞬かもしれない、あるいは80年以上になるかもしれない、もしくはもう少し短いかもしれない。だが、どれであるにせよ魔女には問題なかった。

もはや時の流れから外れた今の場所で悠久の時を過ごしているのである、あと少し待つくらい魔女には何でも無かった。

3 愚者（前書き）

3 / 愚者

とある公園のベンチ。

学校からは5分とかからず、家へと帰る道の途中にある公園のベンチでツバキは月を眺めていた。

視界に映る空はまだ明るい、太陽の姿はもうどこにも見えないが何処か建物に隠れた場所には居るみたいで空はまだ夜になりきれていない明るさを保っていた。

そのまま何の感慨も抱かずに、空に浮かんでいる不完全な三日月を胡乱げな瞳で見つめる。

月を見ても別に何とも思わない、それは特に意味のある行動ではなかった。

ただ心の中でモヤモヤとしている不完全燃焼な気分がそういつた行動へと駆り立てているという、ただそれだけ。

ツバキには分からないことだらけだった。

「……なんだかなあ」

ポツリと呟いて、彼女が屋上で言っていたことに対して思考を巡らす。

それはとても長い言葉で、たどたどしくて、どれもが彼女の確かな偽りの無い想いが込められていると感ずることのできるものだった。

そんな言葉を聞いて、どこかホツとしているような……そんな自分が心のどこかに居るのを感じる。

彼女の想い、彼女の心、そういったものを聴くことが出来て良かったと。

けれど、よくよく思い返してみると屋上で語られた言葉の中で自分が理解をしていることはたったの1つだけだった。

『方向音痴』

そんな4文字の言葉だけ。

それは彼女が語った言葉の前半部分で、後半部分に至っては何1つ理解することが出来なかった。

彼女の言っていた言葉が、屋上で必死な様子で叫んでいた言葉が頭の中で反響する。

「すき焼きみたい、か」

ポツリと呟いて、呆然とする。

彼女は確かにそう言っていた。

『すき焼きみたいに見えてたの!!』

と、そう叫んでいた。

正直なところ、どういふことなのか欠片も分からない。

すき焼きみたいだと言われてもどう反応をすればいいのか分からない、と少し前にも屋上でそんなことを思っていたけれど時間が経っても分からないことはやっぱり分からないままだった。

(これって、褒め言葉なのかな?)

そう思い首を傾げてみる。だが、仮に褒め言葉だったとして何に對して喜べばいいのか果てしなく疑問であった。

(……色々な材料が入っていて、面白い……か?)

思考を巡らして、フムと1つ頷く。

やはり意味が分からなかった。

「はあ、さっぱりだな」

何も分からない、と溜息を吐いて苦笑する。

いくら考えても答えなんてものは1つも出てこなかった。

分からないものは分からない、答えはきつと彼女の心の中にだけあって、それは他人がどんなに考えても答えには辿りつけない。だって、本人じゃないから。

と、そんなことを思う。

そんなことを思って、ツバキはまたボーッとした。

そう考えると

（小さい頃に出会ってから今まで、長い時間を一緒に過ごしてきたけど……）

もしかしたら自分は彼女の何を1つ分かっていないのかもしれない、そう思ってツバキは少しボーッとした。

「……ハッ」

何故だか無性におかしくなって、少し笑ってしまう。

自分がとんでもなく馬鹿な人間に思えて、ツバキはそんな馬鹿な自分を思い切り馬鹿にしたくなった。

「だから、頭に糖分が足りてないとか、そんなことを言われちゃうのかもしれないな」

ハハッと苦笑しながら呟いて、ツバキは手に持つバナナを見つめた。

それは彼女が帰り際に押し付けてきたもので、チラリと横にも目を向けると今も自分が座っているベンチの上にバナナが7本も残っている房が見える。

ツバキにはこれもよく分からなかった。

（まるまる全部渡すかな、普通）

そう思って、何とはなしにバナナをくるくると手で弄ぶ。

バナナは買い物袋に入っていたのである。それは彼女にとって必要だから買ったという、そういうことのはずなのにどうして全部渡してきたのだろうか？とツバキはそう思って首を傾げた。

「……まあ、別にいいけどさ」

バナナは嫌いじゃないし、と心の中で続けて思考を放棄する。

まるまる全部押し付けてきた理由は全くと言っていいほど分らなかったが、別にそれで不都合が生じるわけでもないのでツバキとしては別にどうでもよかった。

ベリツと皮を剥いてバナナを口に運ぶ。

その瞬間、バナナの柔らかな感触と甘い香りが喉内を満たしていくのを感じる。

その感覚は空腹を訴え始めてきている身体には至福のようにも感じられた。

（でも……）

チラリとバナナを咀嚼しながら、横を見る。

房にはバナナがまだ7本も残っていて、ツバキは少しばかりげんなりした。

「流石に、1本で十分だよなあ」

ふう、と鼻から少し甘い息を吐いてバナナを再び齧る。

腹は空いているが流石にバナナを8本も食べる気にはなれなかった。

（家に帰れば、夕飯だってあるはずだし残りは持って帰るか）

そう思いゴクンとバナナを飲み込む。

口の中は甘い感触で満たされていた。

その点を考えても、やはり8本も食べることは出来ないと、そう思う。

バナナを片手に持って帰る姿を想像すると酷く滑稽に思えたが、正直なところ早く何かを飲んで甘い感触を払拭したいと思うので特に何とも思わなかった。

パクリと最後の一口を放り込んで立ち上がる。

空を見上げると三日月が爛々と輝いていて、不完全な夜は完全な夜になっていた。

（流石に、少し遅くなっちまったかな）

パリパリと頬を搔いて、ベンチの上に鎮座しているバナナの房を持ち上げる。

少しばかり公園で時間を潰し過ぎたようであった。

（早く帰るかなあ、それで帰ったら……帰ったら、どうしよう？）

とりあえず飲み物かな、とボンヤリと首を傾げる。

彼女は糖分がどうのと屋上で言っていたが、糖分を補給したところで頭の回転が速くなったような気は欠片もしなかった。

「まあ、とりあえず家に帰るか。叔母さんもいるだろうし」

帰ってからのことは帰ってから考えよう、とツバキは場当たりのなことを考えて自己完結した。

左手にバナナの房を持って、右手でバナナの皮をプラプラさせて歩き出す。

特にやることは思い浮かばない。けれど家に帰って何かをして、布団で寝て、それから朝起きて何故か家の前で待っている彼女におはようって言うって学校へ行く。

きつとそんなことを繰り返すのだろう。そういった何の変わり映えもしない日常が何の変化もなく、この先も続いていくのだろう。

ツバキはそう思って、何だか暖かい気持ちになった。

こんな日常がずっと、いつかサイクルが変わるのだとしても、それでもずっと本質は変わらずに続いていく。

それはもしかしたら退屈だと、まるでルーチンワークのようだと

そんな風に感じることもあるかもしれないが、そんな変わり映えのない毎日が続いていくことを想像するととても暖かい気持ちになった。

（つて、何を考えているんだろうな）

ハハッ、と何だか照れくさくなって苦笑をする。

さつきから随分と恥ずかしいことばかり考えているな、とツバキはそんな自覚をした。

「日常つて、そんな簡単には変わらないから日常つて言うんだよなあ」

ハハッ、と苦笑をしながら肩をすくめる。

まるで馬鹿みたいだ、とそんな風に思えてツバキは思わず頬を掻こうとした。が、手に持つバナナの皮が頬に貼り付いて少し微妙な気分になった。

ベタリ、と皮の内側が触れて不快な感触がする。

「……とりあえず、捨てるか」

そう呟いて、ツバキは微妙な表情をした。

夜風がバナナの皮で少し湿った頬を吹き抜けて、その部分だけが他とは違う感覚がする。

そのことにもツバキは微妙な顔をして、キョロキョロとゴミ箱を探した。

月明かりだけが照らす薄暗い公園の中で頭を巡らす。

「えーと、ゴミ箱、ゴミ箱……おっ、あつたあつた」

探してみるとゴミ箱は意外とすぐ近くにあった。

公園の出口に向かう途中で、ゴミ袋だけが無造作に突っ込んであ

る空っぽのゴミ箱が今から通る道の途中に置いてある。
別に探す必要のある場所に置いてあるわけではなかった。

「……あほくさ」

少し虚しい気分になりながら出口へ向かって歩きだす。

ツバキは自らの行動1つ1つが馬鹿みたいに思えて、少し悲しくなった。

（まあ、それはそれで『らしい』って、そう思うけどね）
そんな風に思えてしまうのも少し悲しかった。

テクテクと、アホなことを考えたままゴミ箱を通り過ぎていく。
そのまま2メートル、3メートルと遠ざかっていって出口付近で
バナナの皮を後ろに向かって投げた。

これでゴミ箱に入れることが出来たら少しは爽やかな気分になる
だろう、とそんなことを思って。

「……入ったかな？」

チラリと後ろを向いて確認をする。

そうするとバナナの皮がゴミ箱の30センチほど前に落ちている
のが瞳に映って、ツバキはやっぱり微妙な気分になった。

（まあ、そんなうまくいかないよね）

バリバリと皮を投げて自由になった右手で頭を掻いてゴミ箱の方
へと向かう。

『投げたゴミに使われる』

まさにそんな状況だった。

（結局、アホくさいまんまだな）

少し自嘲するように肩を竦めてから、道に落ちているバナナの皮
を拾うために膝を曲げる。

無理に気取らない方がいいのかもしれない、とやっぱり少しアホ

くさいと思うことを考えながらツバキはバナナの皮に手を伸ばした。刹那、後ろからドタバタと騒々しい音が聞こえた。真横、それも自分にすれすれなほど近い位置を黒い影が通り過ぎる。

その影は何か鞆のようなものを持って走り過ぎていく、その姿だけがツバキには確認できた。

「……………？今の」

何だっただろう？

そう呟こうとして、その言葉は後ろからの怒号に遮られた。

「待ちやがれっ！私のバッグを返せ！このひったく……………」

「へ？」

「っ！って、その奴っ！どいてどいてっ！っ！」

「え？」

ツバキは瞬間的に後ろを確認しようとして、それが出来なかった。ドンッ、と背中に衝撃を感じて前につんのめる。

そして、ツバキはぐにゅっ自分が今まさに拾おうとしていたバナナの皮を踏んだ。

「っ！」

「悪い！今は構っている暇が無いっ！バッグを取り返したら埋め合わせするから！」

と、薄い白のワンピースを着たポニーテールの女性が叫んで横を通り過ぎていくのを目にする。

だが、ツバキは今そんなことはどうでもよかった。
バランスが保てない。

慌てて手をバタバタと振って、どうにかバランスを取ろうとしたが体勢を立て直すことが出来なかった。

ゆらり、と全ての景色が横倒しになっていく。

ツバキはその瞬間をやけにスローに感じた。

(っ、このまま、倒れこむと……)

後頭部を縁石にぶつけることとなる。

と、ツバキにはこの先に起きることを想像することが出来て、それが非常にまずいことだというのは分かったがもうどうすることも出来なかった。

足なんかとつくに地面を離れていて、体勢を立て直すことなんか既に不可能な状況だったから。

今、その瞬間の中でこんなにも思考を重ねることが出来ているというのも不思議だった。

仮にこのまま後頭部を打ちつけて、打ちどころが悪かった場合

(……死因、自分が捨てたバナナの皮で滑って頭部を強打か?)

何てバカバカしいんだろう、とそう思って少し微妙な気分になる。

やっぱりアホくさい、と苦笑いを浮かべようとして その瞬間、
後頭部に激しい衝撃が走り篠崎 ツバキの世界は暗転した。

3 愚者（後書き）

主人公が考えているだけ、というそんな内容だったりしました（汗

自分は彼女のことを何1つ分かっていないのかもしれない……うん、そのとおりだね！

と、そんなことを言いたくなっていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7526y/>

クレセント・ハート 三日月のクレハ

2011年11月26日22時55分発行